

## (12) 中村南小学校

学 校 長 宮地 由美  
校内研究代表者 岡崎 順哉

### 1. 研究主題

「 見方・考え方を働かせ 資質・能力を育成する 全員参加型の授業づくり  
～思考過程の可視化と共有の工夫を通して～」

### 2. 主題設定の理由

本校は一昨年度から、研究主題を『見方・考え方を働かせ 資質・能力を育成する 全員参加型の授業づくり ～思考過程の可視化と共有の工夫を通して～』として、今年度は3年目にあたる。

研究主題の実現に向け、児童が主体的に学習に取り組めるよう、必然性のある「問うべき問い」を追究すること、既習の見方・考え方を明らかにしてめあて等に示すこと、全員参加型の授業づくりを仕組むことの3本の柱を軸として、算数科を中心に研究を深めてきた。その中で、問いを解決した後に新たな問いが生まれてくるといった、問いが連続する授業展開の確立や、全員参加型の授業を他教科でも展開するなど、授業の行動統一や教科間の広がりが見られてきた。

しかし、各種学力調査の結果から、主の研究教科である算数科では二極化の現状が把握された。子ども達の学力保障には授業と加力の両輪で取り組んできたが、「授業で力を付ける」ことが最大の責務である。そこで今年度は、算数科の研究の深化を中心に、昨年度と同じ研究主題のもと、先に述べた3本の柱の練度を高めることに注力し、見方・考え方の成長から資質・能力を育成する組織的な授業改善をさらに進めていくことにした。

#### 1 問うべき問いの設定

児童の主体的な学びが実現できるよう必然性のある「問い」が生まれる授業を仕組むこと

#### 2 見方・考え方を働かせる

問題解決のために、どんな既習事項が活用できるか協働的に探究し、見通しを持つことで、解決方法を見出す授業を展開すること

#### 3 全員参加型

思考過程の可視化と共有を図り、みんなで学び合い、誰一人とり残さない授業を行うこと

以上の3つの柱のポイントを組織的・日常的に意識して授業を行い、「知・徳・体」のバランスのとれた児童を育成していく。

### 3. 研究の進め方と方法

- ①研究授業の前には、各ブロックで指導案検討会を実施し、単元の中で働かせたい見方・考え方について確認するとともに、見方・考え方が働いている児童の発言等をイメージしながら、目指す児童の姿として指導案に示すようにする。
- ②ブロックだけでなく、全体でも指導案検討を行う機会を設け、単元構想や目指す児童の姿について共通理解を図る。
- ③授業DXの「個別最適な学び」や「協働的な学び」の視点に沿い、児童が自分に合った進度や学び方を選びながら、課題解決に向けて自走できる単元構想を意識する。
- ④研究授業の後には、単元構想についての視点と研究の柱である3つの視点について、協議を行う。
- ⑤指導案検討会及び研究授業では、西部教育事務所から指導主事を招き、専門的な知見による指導や助言をいただく。
- ⑥研究の柱に関する内容は授業改善プランの取組の重点にも示し、授業研を通して学んだことを日々の授業で活かすとともに、自身の授業改善の視点とする。

#### 4. 今年度の成果と課題

○全国学力・学習状況調査	全国比	国語+4.2	算数+7.0				
○高知県学力定着状況調査	県比	4年生国語+4.4	算数+13.3	評定1	国語32%	算数21%	
		5年生国語+5.3	算数+0.9	評定1	国語23%	算数19%	
○標準学力調査	目標値比	1年生国語+4	算数+10.3	評定1	国語0%	算数16%	
		2年生国語+1.1	算数+0.7	評定1	国語39%	算数39%	
		3年生国語+4.5	算数+2.5	評定1	国語30%	算数30%	
		6年生国語+1.9	算数-0.9	評定1	国語32%	算数35%	
○教員アンケート	：「ICTの授業での活用」	肯定的回答	100%				

##### 【成果】

- ・全学年で授業研究を行うことで、全ての教員で目指す授業のイメージや、本校の研究の柱について共通理解を図ることができた。また、各ブロックで実施した教材研究や指導案作成のための話し合いを通して、単元で働かせたい見方・考え方が何であるか、そのような見方・考え方を働かせている児童の姿とはどのような姿なのか考えることができた。さらに、どのような発問・問い返しであれば、児童は見方・考え方を働かせることができるのかなどを考えながら単元構想を立てることができた。
- ・ICTを活用して表現させることで、児童がアウトプットする場を増やすとともに、思考の過程が可視化されるようにすることで、児童間での共有や教師の見取りが行いやすいようにした。また、クラウドを用いて板書など学習の記録を整理して残したり、単元で働かせたい見方・考え方につながる既習を掲示したりすることで、児童が既習内容を確認しながら、児童が自らの学びを自己調整し、課題解決に向けて自走できるように、検討し実践することができた。

##### 【課題】

- ・各学力調査の結果より、基礎的な考え方や知識・技能の定着は見られてきたものの、発展・応用的な問題や思考力・判断力・表現力等に関する正答率の低さは課題として見られている。児童が本時や本単元の学びを、既習と結び付けて考えることができているか。あるいは、単位数や単位量をもとにして考えるなど、単元や領域が異なる場合でも、考え方は同じであるというふうに統合的に捉えることができているか。などの視点で授業の振り返りや改善を行っていく必要がある。
- ・授業DXの視点である「個別最適な学び」や「協働的な学び」を推進していくうえで、タブレットを用いて表現したり、クラウド上で共有したりすることは必要不可欠である。ICT活用の差が理解度に影響しないよう、児童が情報モラルや学習の決まりを守ってタブレットを活用することや、ICTの基本的なスキルを身に付けさせることが大切である。さらに、クラウド上に集まった情報を精選することで、児童同士による他者参照を効果的にしたり、教師が児童の考えを適切に見取り評価へとつなげていくことなどについては、今後も検討していく必要がある。

次年度に向けて、学級経営を基盤に学びに向かう集団作りを行うとともに【問い、見方・考え方、全員参加型】の3本柱についての捉え方や授業展開のイメージを教員間で共有しながら「個別最適な学び」や「協働的な学び」を推進していく。そのためには、校内研等の充実を図りながら組織的に授業改善に取り組む体制を構築していく。